高松大学紀要，36．93～105

高松市内の子育てサークルの実態に関する研究

苧坂恵美
松原勝敏

A study on the actual conditions of parents circles for child care in Takamatsu city.

Megumi Osaka
Katsutoshi Matsubara

Abstract

The purpose of this study is to make clear the actual conditions of parents circles for child care by investigation.

Recently, in Japan, for mothers, to nurse a nervous breakdown caused by the stress of child care, to communicate with other parests, and to play and let ther children play together with other parents and their children, many parents cirles have been organized.

According to our investigation, we found that parents are content with the circles not by having their children play with other children but by their communicating with other parents, and that parents circles are usuful to encourage mothers in caring their children.

Key words：parents circle, nervous breakdown

はじめに

少子化や核家族化が進行する中で，子育て中の保護者が集まってお互いの情報交換や育児の悩みを話し合えるような場，親子のふれあう行事を企画・運営したり，参加して楽しめる場所づくりが，「子育てサークル」として次第に活発になってきている。(財)香川県児童・青少年健全育成事業団発行の『わくわくドキドキ子育てサークル』（平成11年１月）によると，高松市内には22のサークルが存在し，サークルごとに活動目的を掲げて活動を展開している。

ところで，子育てサークルの活動に参加する保護者は，どのような目的をもってサークルに参加し，どのような活動を実際に行っているのか。また，サークルに参加することに

どの程度満足しているのか。こうした点についての研究は，今のところ十分になされているとは言えないであろう。

そこで，本研究では，子育てサークルに参加している保護者を対象に子育てサークルへの参加目的や取り組んでいる活動，参加目的の達成度などを中心にアンケート調査を行うことによって，子育てサークルが子育て中の保護者にとってどのような意味をもつのかを考えていきたい。

なお，本稿は，第41回中・四国保育学生研究大会で，本学幼児教育学科代表として芋坂恵美が行った発表を加筆・補正して，別稿として掲載するものである。その主たる意図は，研究大会ではアンケートの限られた項目しか発表できなかったので，貴重な時間を割いてアンケートに回答してくださった保護者の方々のご厚意を無駄にしないために調査の結果をすべて公にすることである。また，本研究は，芋坂恵美が主となり松原勝敏がそれをサポートするという形で行った。よって，本研究は，共著の形式をとっているが，実質的に芋坂恵美の研究業績である。

1．子育てサークル誕生の背景

この部分では，子育てサークルが誕生する背景となった社会状況を，ごく簡単にまとめておきたい。

(1) 少子化の深刻化

周知のごとく，少子化現象は，我が国において深刻な社会問題と化した。終戦直後の第一次ベビーブームの時期，最高で，昭和24（1949）年には270万人を数えた出生数は，その直後から減少傾向を示し，昭和40（1966）年の丙午の年に大きく落ち込んだものの第２次ベビーブームの時期，昭和48（1973）年に209万人にまで回復した。しかし，その後再び減少傾向に転じることになる。合計特殊出生率でみてみれば，昭和24（1949）年の4.32から大きく減少し，第２次ベビーブームのピークでも2.14までしか回復しなかった。そして，平成元（1989）年に，丙午の年を下回ったいわゆる1.57ショックを契機として少子化現象が衆目を集めるようになるとともに深刻な社会問題として語られるようになった。

合計特殊出生率は，平成11（1999）年に過去最低の1.34を記録するに至ったが，平成13（2001）年６月20日の厚生労働省による人口動態統計の発表によると，平成12（2000）年の合計特殊出生率は，1.35とミレニアムベビー効果も手伝って微増しているが，長期的な少子化現象に歯止めをかけるものとはなっていない。

このような状況の下，いろいろな方面に影響がでることが懸念されているが，子育てという面からすると，子どもの健やかな成長に対する影響が心配される。子どもは，その成長過程において，遊びを通して様々な人々とふれあいながら豊かな個性や創造力，また，社会性を身につけていく。しかしながら，少子化によって子どもに対する保護者の過保護や過干渉の傾向が現れる一方で，子ども同士の交流の機会が減少するなど，子どもが従来においては自然に身につけることができた人間性や社会性を育むチャンスが失われるという指摘がなされるに至っている。

(2) 子育て家庭の孤立化

高度経済成長以後急速に増加した核家族世帯は，1960（昭和35）年の1179万世帯から，1995（平成７）年の2576万世帯へと２倍以上に増加した。家族類型別にみた場合，全世帯に占める核家族の割合は1980（昭和55）年の60.3％を頂点に減少に転じたものの，今日もなおその割合は全世帯の６割近くを占めている。

核家族での子育てにおいて困難性が指摘される点の一つは，子育てに関する援助を祖父母から受けにくいことである。当然の事ながら，第一子に対する子育ては，その夫婦にとってははじめての経験であって，育児上の様々な困難にとまどい，些細なことにまで一喜一憂してしまうことが考えられる。このようなときに，子育て経験者である祖父母が近くにいれば，育児上の様々なアドヴァイスを夫婦に対して行うことができるが，核家族形態が多数を占める今日においてそれは難しい。

他方，特に新興住宅地においては，他の土地から移り住むようになった人々によって社会が構成されるので，かつてみられたような地域共同体的な意識が薄い。そのために，近隣の人々との人間関係は希薄になって，育児上の様々な支援を地域社会から受けることが難しい状況に至っている。また，そのような地域社会において成立している既成のグループに参入する場合にも困難が伴い，その結果，いわゆる「公園デビュー」は，育児をする母親にとって，大きな関門となりつつあるという指摘もなされている。

(3) 育児不安・育児ストレスの増大

上に記した社会状況の下，子育てをする親，特に母親の育児不安・育児ストレスの深刻化が指摘される。

例えば，少子化現象による子どもの数の減少は，子どもの創造性や社会性の発達の面での不安を引き起こす。また，子どもの絶対数が減少することによって，親は，自分の子どもの成長発達を比較する対象を失い，その結果，育児情報誌等に頼ることになっても，マ

ニュアル通りにはことが運ばない子育てによって，育児不安は増大してしまうのである。

また，特に核家族世帯で子育てに祖父母の援助を容易に得ることができない状態にあることに加えて，地域社会から孤立したような状態にあれば，こうしたことそのものが育児不安・育児ストレスの増大に結びついてしまう。

さらに，社会には子どもを育てている親を不安に陥れる材料は山ほどある。例えば，自分の子育てによって，子どもが将来にいじめたりいじめられたりする恐れはないか，不登校になったりはしないか，などといった自分の育児が正しいかどうかという不安がある。また，過剰な清潔志向に環境汚染の問題が拍車をかけて，子育てに過剰なまでの神経を使ってしまったりすることもある。そして，早期教育の低年齢化などがますます，親の不安やストレスを増幅させるものとなってしまうのである。

2．高松市における子育てサークルの概況

香川県・(財)香川県児童・青少年健全育成事業団発行の『わくわくドキドキ子育てサークル』（1999（平成11）年）には，高松市内の22の子育てサークルが紹介されている。もちろん，これ以外にも自主的な活動を行っているサークルは存在するので実数を把握することは不可能であるが，本節においては，おおまかな傾向を把握するために，「わくわくドキドキ子育てサークル」に紹介されている21の子育てサークルに限って（『わくわくドキドキ子育てサークル』に紹介されている22のサークルの内，１つは体操教室と銘打っており，他のサークルと性格が異なるために対象から除いた），その活動の対象者，活動規模，活動状況，活動目的，活動場所等をごく簡単に見ていきたい。

まず，活動の対象者としては，参加可能な子どもの年齢を１歳から４歳，２歳から３歳などと制限を設けている所もみられ，実際の所様々であるが，就学前の乳幼児とその保護者を対象とする点でおおむね共通している。

活動の規模は，子どもと保護者20組弱から50組前後までの規模で活動をしているサークルがほとんどである。50組を超えるサークルは多くないし，あまり大きな規模のサークルは活動に適さないようである。活動状況は，月に１回から４回までで収まり，１回あたりの活動時間は長くても２時間程度である。

活動の目的については，それぞれのサークルの紹介のページにおいて，サークルの活動目的の表現が異なるために正確な分類は難しいが，主として子育て中の親が，同様に子育てのさなかにある親たちとの交流を図る中で，育児情報の交換を行ったり，育児上の不安

やとまどいをうち明けることによって，育児上の不安やストレスを解消することを目的とする場合が大勢を占める。

活動場所は，そのほとんどが地区の公民館を利用している。中には，高松市女性センターや保育所を活動場所にしている場合もわずかながらみられた。

3．アンケート調査の方法

・調査対象：香川県高松市内21カ所の子育てサークルに参加している保護者

・調査方法：郵送による質問紙調査法

・実施期間：平成12年９月上旬～10月上旬

・回 収 率：45.9％（319名）

4．結果と考察

(1) アンケート回答者の属性

回答者の属性について，まず子育てサークルに参加する保護者の性別（図１）について，回答者319名の内，298名（93.4％）が女性であった。残りの21名は性別の回答がなかった。子育てサークルは，就学前の子どもとその母親で構成されているといっても過言ではないであろう。

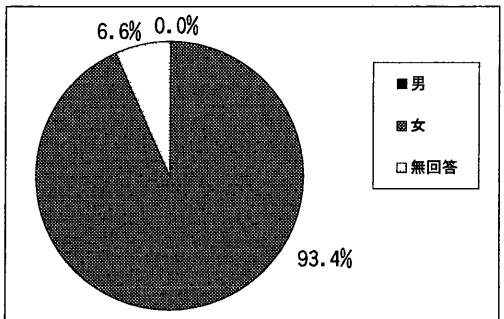

図１　子育てサークルに参加する保護者の性別

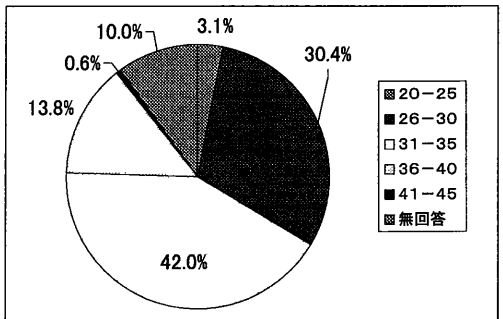

図２　子育てサークルに参加する保護者の年齢

保護者の年齢（図２）は，31歳～35歳が134名で一番多く（42.0％），次いで26歳～30歳が97名（30.4％）で大勢を占める。子どもの数（図３）は，２人が最も多く（47.0％），次いで１人（43.3％）であった。ちなみに，最高は４人であったが，その割合はわずかに1.2％である。

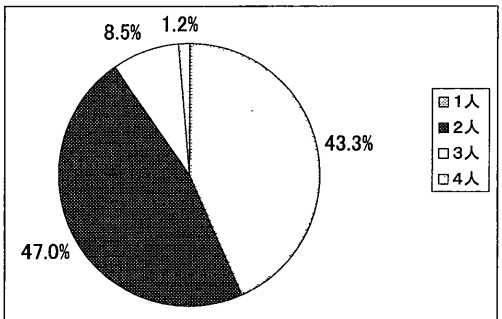

図3　子育てサークルに参加する保護者の子ども数

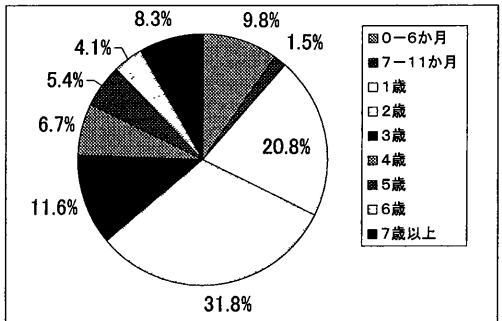

図4　子育てサークルに参加している子どもの年齢

子どもの年齢（図4）については，複数の子どもをサークルに連れてきている保護者もいるので，回答をいただいた保護者とともに参加している子どもの数（519名）の中での割合を示せば，1歳が108名で20.8%，2歳が31.8%で他の年齢の子どもたちの割合を大きく引き離している。これは推測であるが，歩行ができるようになったあたりからサークルに参加し，幼稚園に入園するまでサークルに加入しているということなのかもしれない。

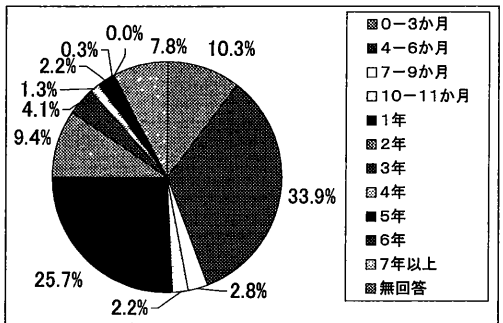

図5　子育てサークルに所属している期間

なお，サークルに所属している期間（図5）は，4～6か月と答えた保護者が最多で（33.9%），次いで1年（25.7%）であった。中には，わずか1名であるが，6年間所属していると答えた保護者がいた。

(2) 保護者に対する子育てサークルの近接度

高松市内に存在する子育てサークルに通うための交通手段（図6）としては，自家用車やバイク（47.4%），自転車（39.0%），あるいは徒歩（11.2%）でサークルに参加している場合がほとんどであり，公共の交通機関を利用する者はほとんどいなかった（0.8%）。また，子育てサークルに通うために必要な時間（片道）（図7）は，15分以内（78.0%）と16～30分（15.6%）をあわせると93.6%に達する。子育てサークルは，自宅から通いやすい場所に存在している，あるいは，自宅から通いやすいサークルを選択しているようである。

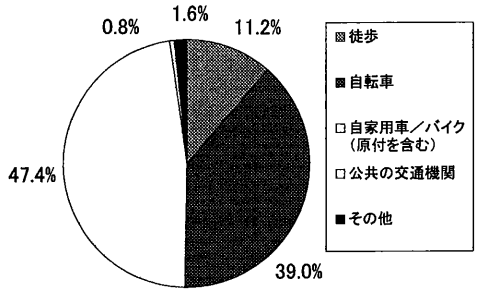

図６　子育てサークルへの交通手段

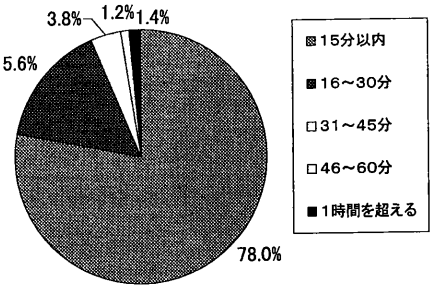

図７　子育てサークルに通うための所要時間(片道)

また，「子育てサークルでの必要経費を負担に感じますか？」（図８）という質問に対しては，「あまり負担を感じない」（41.5%），「全く負担を感じない」（40.7%）と答えた保護者をあわせて82.2%であった。一方，「負担」（0.6%），「やや負担」（1.7%）と答えた保護者は，あわせてわずか2.3%だった。

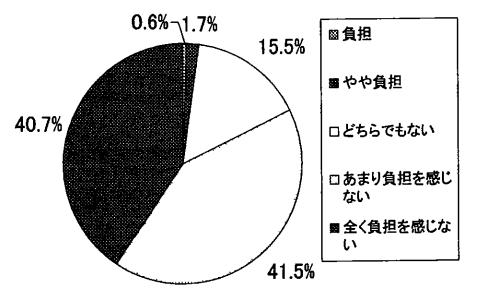

図８　子育てサークルの必要経費について

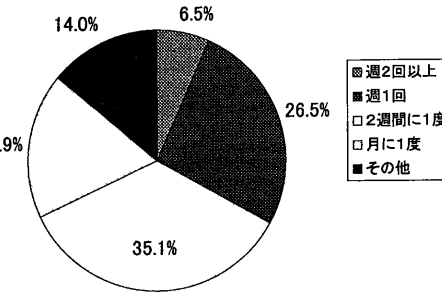

図９　子育てサークルに参加するか回数

これらのことから，子育てサークルは，子育て中の保護者にとって身近な存在で気軽に参加することができるものになっていると言える。なお，実際の参加（図９）については，週１回から月１回のペースで参加している保護者が多い。その参加程度（図10）は，ほとんど毎回参加すると答えた保護者が全体の67.6%を占める一方で，ほとんど参加しないと答えた保護者は2.7%であった。

子育てサークルを知ったきっかけ（複数回答）（図11）としては，「友だちの紹介」が52.0%，「広報雑誌等」が26.6%，「その他」が15.1%（ほとんどの場合，保健婦さんからの紹介）という結果だった。子育てサークルは，口コミを通して拡大・普及しているように思われる。

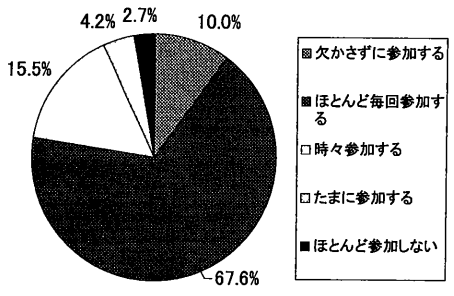

図10　子育てサークルへの参加程度

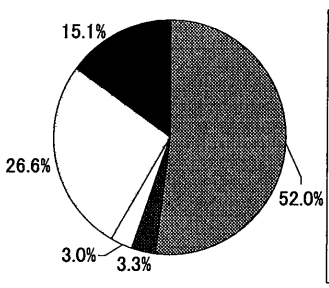

図11　子育てサークルを知ったきっかけ

(3)子育てサークルでの活動

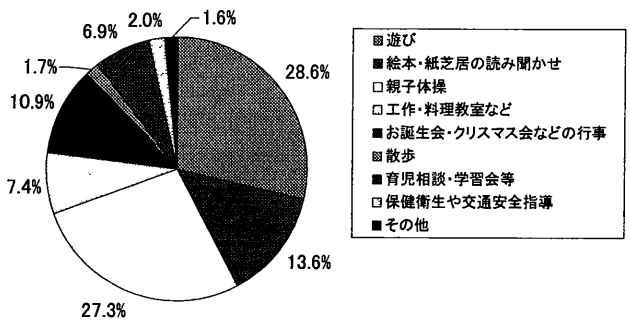

図12　主に子どもと一緒に参加している活動

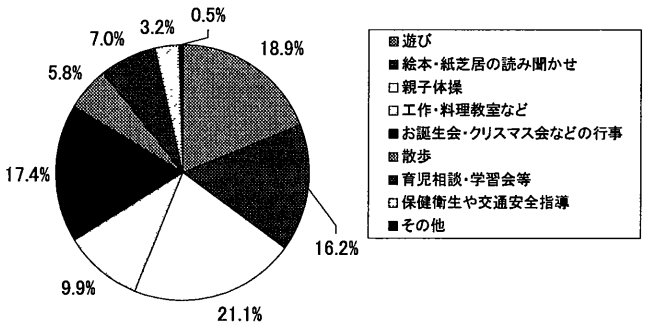

図13　これから参加したいと思う活動

子育てサークルに参加している保護者が，実際に，子育てサークルの活動の中で，子どもと一緒に活動しているものは，遊び（28.6%），親子体操（27.3%），絵本・紙芝居等の読み聞かせ（13.6%），お誕生会・クリスマス会などの行事（10.9%）の順で多い。また，これから参加したいと思う活動は，親子体操（21.1%），遊び（18.9%），お誕生会・クリスマス会などの行事（17.4%），絵本・紙芝居の読み聞かせ（16.2%）となっている。その一方で，講演会や学習会・座談会，保健・交通安全指導等の活動には，必ず参加すると答えた保護者は，全回答者の中でわずか1桁の人数にとどまる一方で，いっさい参加しないと答えた保護者は全体の3割前後を占める。また，これから参加したい活動に

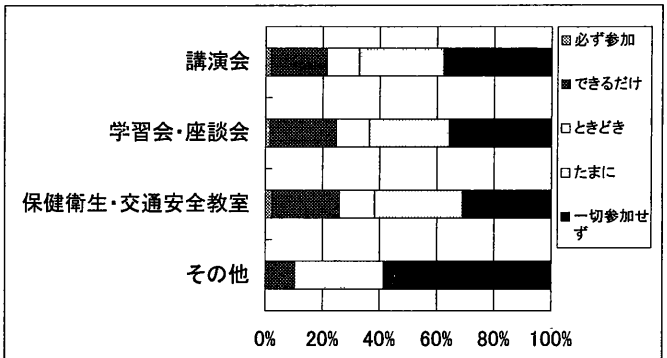

図14　講演会その他への参加

ついての回答結果を見ても，育児相談・学習会等（7.0%）と保健衛生や交通安全指導（3.2%）をあわせても全体の10%あまりである。子育てサークルは，保護者の学習の場と言うよりは，子どもと保護者のふれあいを通した活動の場として機能しているようである。

(4) 子育てサークルのへの参加目的

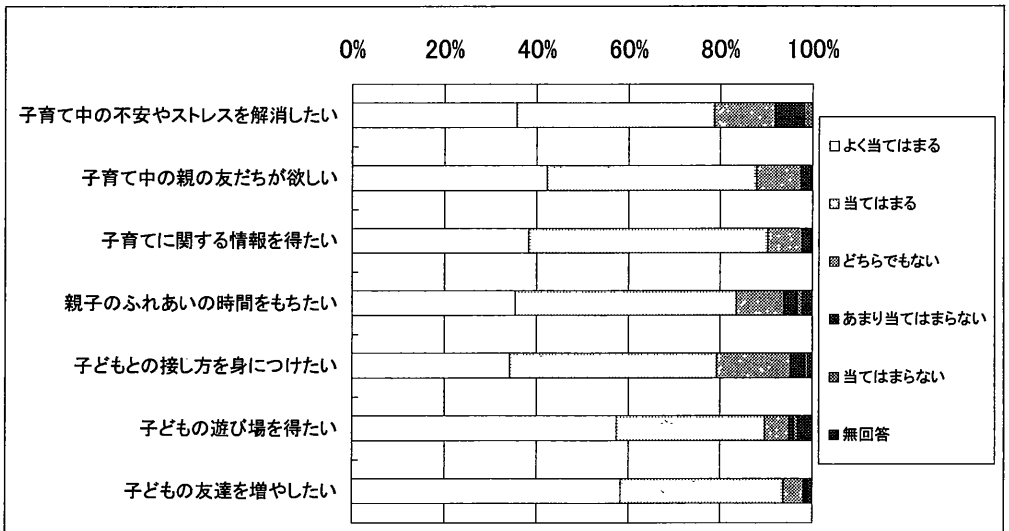

図15　子育てサークルへの当初の参加目的

子育てサークルへの当初の参加目的（図15）は，すべての質問項目に対して「よく当てはまる」「当てはまる」と答えた保護者が多かった。なかでも，「子どもの遊び場を得たい」「子どもの友だちを増やしたい」に「よく当てはまる」と答えた保護者がそれぞれ57.4%，58.3%であった。その他の項目については，「よく当てはまる」と答えた保護者が，「子育ての不安やストレスを解消したい」（35.7%），「子育て中の親の友だちが欲しい」（42.6%），「子育てに関する情報を得たい」（38.2%），「親子のふれあいの時

間をもちたい」（36.4%），「子どもとの接し方を身につけたい」（34.2%）であった。子育てサークルに参加するに当たっては，子どもの遊び場を得るなど子ども自身に関する目的をもって参加する保護者が多く，育児不安の解消など親自身に関わる目的は相対的にその割合が低かった。

(5) 子育てサークルへの参加目的の達成の度合い

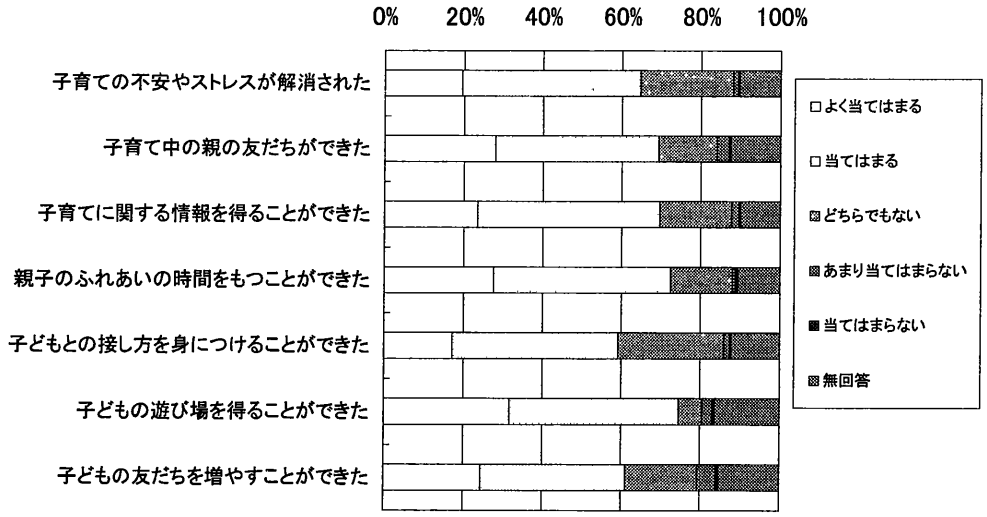

図16　子育てサークルへの当初の参加目的の達成度

子育てサークルに参加することによって，当初の参加目的が達成されたかどうか（図16）について，「子どもの遊び場を得ることができた」に「よく当てはまる」，「当てはまる」と答えた保護者は74.6%いたが，「子どもの友だちを増やしたい」については，子どもの年齢が低いほど友だちづくりが難しいのか，増やせたと答えた保護者は61.1%にとどまった。その他「子育ての不安やストレスが解消された」（64.6%），「子育て中の親の友だちができた」（69.3%），「子育てに関する情報を得ることができた」（69.6%），「親子のふれあいの時間をもつことができた」（72.4%），「子どもとの接し方を身につけることができた」（59.2%）に保護者が「よく当てはまる」，「当てはまる」と答えていた。

しかし，子育てサークルの参加目的が達成された割合は全体的に高いものの，「よく当てはまる」と答えた保護者の割合が，当初の参加目的に比べると総じて低くなっている。サークルの活動は保護者のニーズによりよく応えるために改善の余地が残されていること

がうかがえる。

先にも見たように，子育てサークルの活動でこれから参加したいと思う活動は，上位3位が，やはり「遊び」「親子体操」「絵本・紙芝居の読み聞かせ」であった。なお，「工作・料理教室など」「お誕生会・クリスマスなどの行事」「散歩」「保健衛生や交通安全指導」といった活動への参加を望んでいる保護者はかなりの人数にのぼっている。今後，これらの活動にも精力的に取り組んでいくことが，子育てサークルに対する新たなニーズに応えることになるだろう。

(6) 保護者の子育てサークルへの参加意識

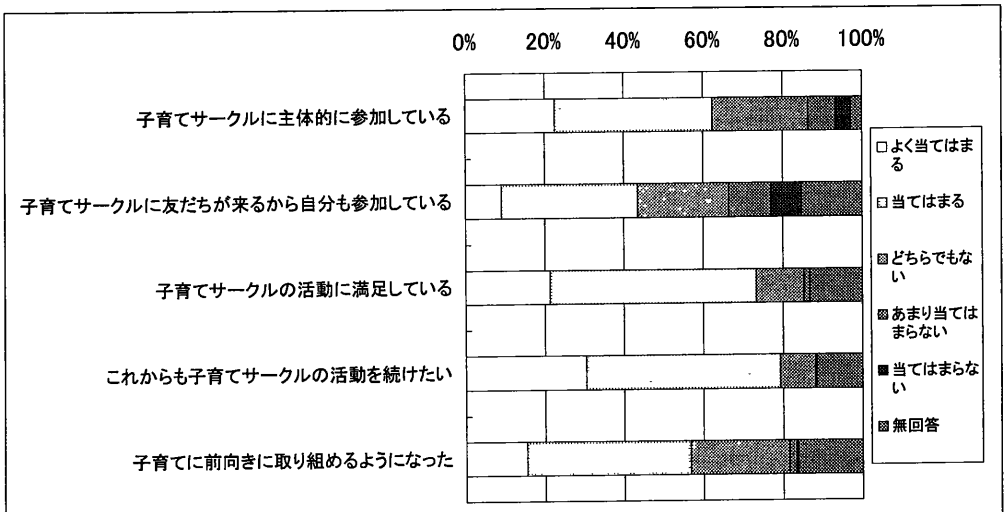

図17　子育てサークルへの参加意識

最後に，子育てサークルの活動への参加意識について（図17），73.4%の保護者が「子育てサークルの活動に満足している」，79.3%の保護者が「これからも子育てサークルの活動を続けたい」と答えていた。そして，56.7%の保護者が子育てサークルに参加することによって「子育てに前向きに取り組めるようになった」と答えていた。

しかしながら，「子育てサークルに主体的に参加している」と答えた保護者が62.4%存在する一方で，「友だちが来るから自分も参加している」と答えた保護者が43.6%存在する。(4)及び(5)に見たように，子育てサークルに参加する際の期待が大きい反面，とても満足している保護者の割合が総じて低くなっていたことと考え会わせると，子育てサークルへの参加の継続には保護者どうしの友だち関係に支えられている面もあるように思われる。

おわりに

本稿を終えるに当たり，本稿の内容を要約するとともに，子育てサークルの活動において推測される今後の課題を若干指摘しておきたい。

高松市内の子育てサークルは，交通手段やその所要時間，必要経費等から見ると，子育て中の保護者にとって身近な存在で，気軽に参加できるものとなっていると言える。また，子育てサークルの活動内容としては，「遊び」「親子体操」「絵本・紙芝居の読み聞かせ」といった親子のふれあいの機会となる活動が中心に行われている。

参加目的には，「子育て中の不安やストレスを解消したい」というような親自身に関するものよりも，「子どもの遊び場を得たい」というような子どもを中心とした目的をもって参加している保護者が多いことが分かった。

子育てサークルに参加することに対する保護者の満足度は全体的に高い。しかしながら，サークルへの当初の参加目的に対する期待度に比べてみると，十分な満足感を得られているかどうかは疑問が残る。この点が，サークルへの加入期間の長さにも影響しているのかもしれない。また，友達関係によって加入が継続されている点も着目すべきであろう。子育てサークルは保護者のニーズを満たすものとなりえていると言えるであろうが，保護者の多様なニーズを吸収することによって今後の発展が期待される余地が大きい。

ところで，もう一点課題を指摘するならば，参加する保護者が母親に偏っている点を挙げることができるであろう。『わくわくドキドキ子育てサークル』を見る限り，参加する親を母親に限定しているサークルは，22のサークルのうち５つのサークルのみである。もちろん，意識せずに「保護者」あるいは「親」という語を用いていることも考えられるが，アンケートに回答を寄せてくださった保護者も性別の未回答者を除けばすべて母親である。『厚生白書』平成10年度版をはじめ，多くの資料において，育児は父母が共同で行うべきものとの意識がありながらも，母親にその負担が重くのしかかっている実態が指摘されている。もちろん，育児負担が母親に偏っている現状で，その負担やストレスを解消するために育児サークルが果たしている役割には非常に大きなものがあることは間違いないが，今後は父親をサークルでの活動に導くことが，サークルの発展のために重要な課題となるのではないであろうか。

今後，子育てサークルは，参加者の新たなニーズに対応して，その活動内容を多様化していくことが予想される。子育てサークルは，子育ての共同化という観点から，地域レベルの子育て支援においてますます重要な役割を担っていくだろう。

主要参考文献
・(財)香川県児童・青少年健全育成事業団　1999　『わくわくドキドキ子育てサークル』
・柏木恵子・森下久美子　1997　『子育て広場武蔵市立０１２３吉祥寺―地域子育て支援への挑戦』ミネルヴァ書房
・増山　均　1992　『子育て新時代の地域ネットワーク』大月書店
・大日向雅美・佐藤達哉　1996　『現代のエスプリ子育て不安・子育て支援』至文堂
・(財)こども未来財団　1999　『少子社会の論じ方』
・厚生省『厚生白書』平成10年度版

謝辞：末筆ながら，ご多忙にもかかわらず，アンケートにご協力をいただきましたサークルの主催者のみなさま，参加されている保護者のみなさまにお礼申し上げます。

苧坂恵美（おさかめぐみ）　高松東幼稚園教諭
松原勝敏（まつばらかつとし）　高松短期大学助教授